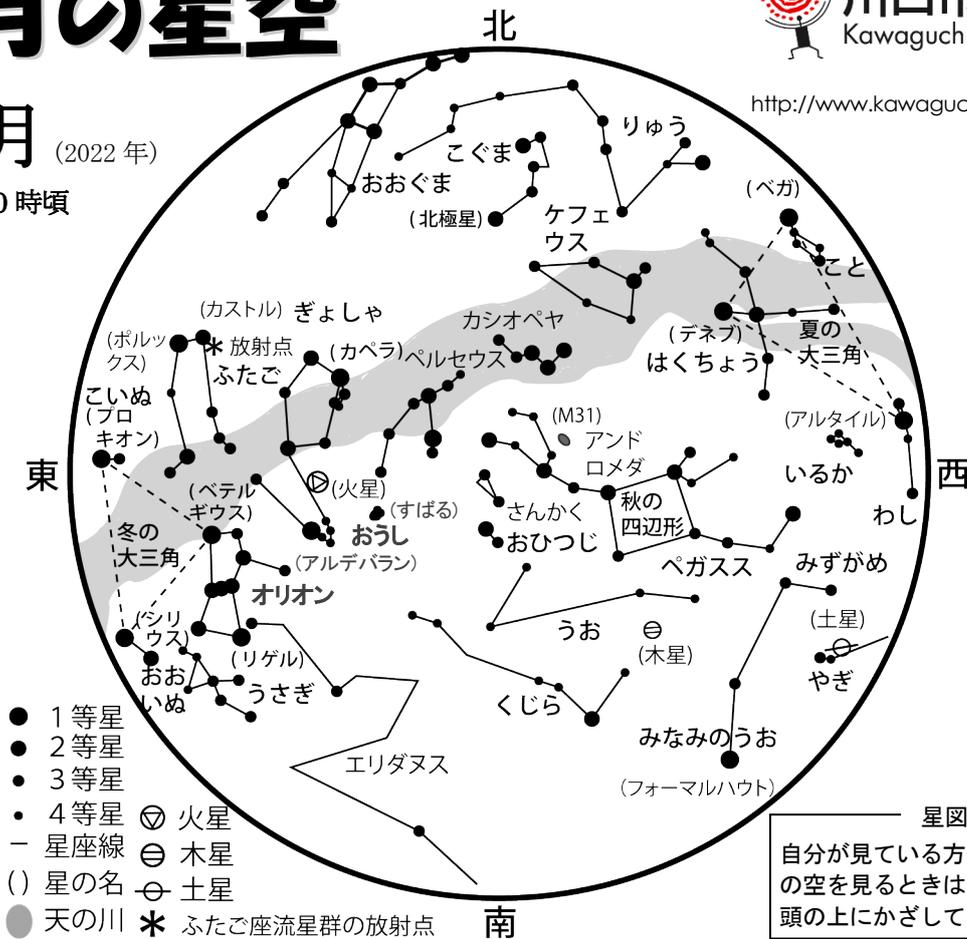


今月の星空



12月 (2022年)

中旬 20 時頃



月 齢 ○満月 8日、●下弦 16日、●新月 23日、●上弦 30日

惑星情報 火星 夜のはじめ頃 東(おうし座 -2→-1等)

木星 夜のはじめ頃 南→南西(うお座 -3→-2等) 土星 夜のはじめ頃 南西(やぎ座 1等)

★冬の星座対火星～12月1日 火星最接近～

東の空には、ぎょしゃ座とおうし座を先頭に冬の星座が昇ってきました。冬の星座は明るい星が多い上、今年はおうし座に、約-2等で輝く火星があるため、さらににぎやかな星空となります。

火星は12月1日、約2年2か月ぶりに地球に最も近づく「最接近」を迎えます。右図のとおり、8月時点で、その距離は1億6,900万km(視直径8.3秒角)であったのに対し、最接近時には、およそ半分の8,145万km(視直径17.2秒角)まで近づき、見かけの大きさも大きくなります。明るさも8月の0.2等から最接近頃は約7倍の-1.9等に達します。その後、少しずつ暗くなりますが、下旬でも全天で最も明るく見える恒星、シリウス(-1.4等)ほどの明るさを保っています。周囲にある冬の星座の1等星、特に火星に似たオレンジ色のアルデバラン(0.9等)やベテルギウス(0.5等)と見比べてみましょう。

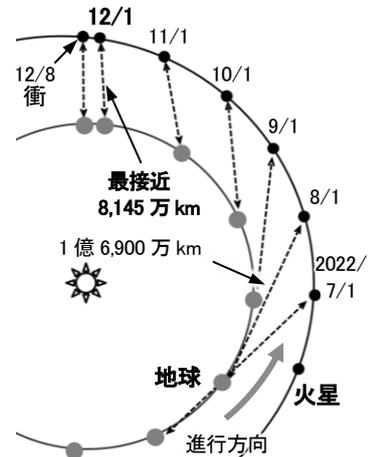


図 地球と火星が接近する様子

※「最接近」時の距離は毎回異なる。明確な定義はないが、一般に軌道間隔の狭いところでは「大接近」(6,000万km以下)、間隔の広いところでは「小接近」(1億km程度)と呼ばれる。今回はその中間ほどで「中接近」となる。

★ふたご座流星群を見てみよう～14日 22時極大～

三大流星群のひとつ、ふたご座流星群が14日22時頃(日本時間)に極大を迎えます。他の三大流星群に比べて、夜の早い時間帯から流星の出現が期待でき、かつ、今年は極大が夜間に当たる好条件であるため、初心者の方や不慣れな方にもおすすめです。一般に、流星群は放射点を中心に放射状に流れるため、放射点が低いときよりも高いときの方が、より多く観測するチャンスがあります。ふたご座流星群の場合は、夜のはじめ頃から放射点が比較的高いため、観測の目安は、14日(もしくは13日)の21時頃から明け方までとなります。空が広く見渡せる場所で、最低でも15分以上は見続けてみましょう。

※【三大流星群の放射点の高さの変化(極大頃)】しぶんぎ座流星群(1月)…21時 地平線下→0時 9度。ペルセウス座流星群(8月)…21時 14度→0時 33度。ふたご座流星群…21時 34度→0時 70度。